

華陵高校舞台芸術部 令和四年度上演作品

はなおか まい

『ファンタスティックライフ』 作・華陵 舞

【受賞歴】

第三九回周防地区高等学校演劇発表会（最優秀賞）

第四一回山口県高等学校演劇大会（最優秀賞）

第六〇回中国地区高等学校演劇発表会（優良賞）

【上演人数】

九〜十五人程度

【あらすじ】

歳を取って生活に支障をきたし始めている祖母。世話に訪れた母とも衝突することも増えてきている。ノゾミは祖母に同情しながら、どんどん支配的になっていく母に対して、不満を持っている。そんな中で、祖母の元に奇妙な便利グッズ「ファニちゃん」と、営業マン・スズキがやってくる。「ファニちゃん」を使いこなして、生き生きとした生活を取り戻した祖母だったが……。

【上演許可申請先】

上演を希望する場合は、karyobutage.since1996@gmail.comへ左記を明記のうえ、ご連絡ください。

- ①上演作品
- ②目的（催物名、主催者名、会場等）
- ③公演日、上演回数
- ④対象観客（一般公開・配信の有無）
- ⑤入場料（有料の場合は金額も）
- ⑥担当者名および連絡先

※著作権使用料の入金先などは折り返しご連絡いたします。

【登場人物】

ノゾミ（イマイノゾミ）

祖母（ヤマダサチエ）

母（イマイユウコ）

スズキ

トモ※ファニちゃん・コロスとの兼役可

伯父（ヤマダオサム）※ファニちゃん・コロスとの兼役可

ファニちゃん・コロス・少女

【CM】

暗闇の中、テレビショッピングかコマースシャルのような音声。

スズキ（声）『現在こちらのキャンペーンサイトをご覧いただいているお客様だけに朗報です！ 画期的な新商品《ファニちゃんシリーズ》をなananなんと！ 無料で体験できるモニターキャンペーンを実施中♪ あなたの生活をもっとファンタスティックに！ お申し込みは24時間、こちらの番号で受け付けております！ お電話いただけますぐ……』

【1 おばあちゃんの苛立ち】

昼下がりの民家。祖母が何か探し物をしている。うろろろとしているが、結局見つからない。ふと何かを思い出して、奥の台所に入っていく。しばらくして、ノゾミ登場。

ノゾミ おばーちゃん、きたよー！ おばーちゃん！

祖母 （台所から出てきて） ああ、ノンちゃん。よく来たね。車込んでなかったかい？ お母さんは？

ノゾミ もう来るんじゃない？ 私今、お母さんと冷戦中なの。

祖母 冷戦？

母、買い物袋と郵便物や新聞を抱えて、忙しく登場。ノゾミ、母に気づいてそっぽむく。

母 ちよつと母さん。郵便受け、毎日チェックしてって言ったでしょ。ノゾミ。（靴をそろえるように言う）

祖母 なに、来て早々。

母 （祖母に）だから、郵便、たまってたんだだけ。（ノゾミにお供え物のお菓子を渡しながら）

ノゾミ、これ、おじいちゃんに持ってって。

ノゾミ、無言でお菓子を受け取って、隣の部屋へ姿を消す。

祖母 後でとろうと思ってたんだよ。

母 先月住民税の督促来てて、大騒動したばかりでしょ。もう、ホントやめてよね。

祖母 うるさいねえ。

母 うるさいってねえ。ちよつとは素直に人の話聞いたら。わざわざこうして必要なもの買ってきてあげてるのに……。

祖母 車さえあれば自分で……。

母 まだそんなこと。散々話し合って、もう運転はしないって約束したでしょ。

祖母 大げさなんだよ。ちよつとひっかけたくらいで。

母 ちよつとひっかけたくらいで、車のドアは飛んでいかないでしょ。人様をひき殺したりでもしたら取り返しがつかないんだから！ この間だってニュースで……。

祖母 あーもううるさいねえ！

隣の部屋から、饅頭を手に持ったノゾミが戻ってくる。

ノゾミ (二人の様子にちよつとびっくりしつつ) ……ねえ、このお饅頭って食べていい？

祖母 (怒りを隠して) ああ、いいよ。

母 待って。(ノゾミから饅頭を奪い取り) やだこれ、前に持ってきたお供え！ もう賞味期限過ぎてるし！

ノゾミ (饅頭を奪い返して) 別にこのくらい大丈夫だよ。

母 (饅頭を奪い返して) やめてよ、おなか壊したら、どうするの。

母、そのまま饅頭をゴミ箱に捨ててしまおう。

母 (祖母に)とにかく、あとまた出るから、なんかいるものあるなら言っといてよ。トイレト

ペーパーとか、洗剤とか……。

しゃべりながら、母は買い物袋を持って奥の台所へ姿を消す。

母 (台所から金切り声で)ちよつと母さん！(台所から顔を出して)母さん！ちよつと来て！

祖母 なんだい、騒々しい。

母 いいから！

母に促されて、祖母も台所へ。

祖母 (台所から声のみ)なに。

母 (台所から声のみ)コ・ン・ロ・の・火！つけっぱなしだったんだけど！火事にでもなっ

たらどうするつもり？！

祖母 (台所から声のみ)いちいちうるさいね。

(台所から声のみ)うるさいってなに！シンクもこんなに洗い物ためて、ごみだって……。

母 (台所から声のみ)これだけ火事になったら全部燃え移るんだからね！

(台所から声のみ)いちいち大きな声出さなくてわかってるよ。

祖母 (台所から声のみ)わかってないから言ってるのよ。自分のことが満足にできないんだったら

……
(台所から声のみ)うるさいッ！

ガラスの割れる音。祖母が怒りに任せてコップを投げ割ってしまったようだ。祖母は台所から出てきて、無言のまま奥の部屋に消える。不安そうに祖母の後姿を見ているノゾミ。母は無言で隣の部屋から箒と塵取りを持ってくる。

ノゾミ ……手伝う？

母 ……いい。危ないから。

母が片付けている様子を見ているノゾミ。しばらくして母、台所から出てくる。

母 お母さんちょっと出てくるから。留守番お願い。

ノゾミ ……ねえ。

母 なに？

ノゾミ 大学の話……。

母 ごめんけど、その話は家に帰ってからにしてくれる？

ノゾミ ……わかった。

母、退場。ノゾミは縁側に座って、スケッチブックに絵を描き始める。

【2 トモとスイカ】

トモ、スイカの入ったビニール袋持って登場。ノゾミは夢中で絵を描いているので気づいていない。トモはそれをしばらく見つめている。

ノゾミ (トモにやつと気づいて) トモ！

トモ 久しぶり。元気？

ノゾミ ん？ 普通？ トモは？

トモ うちも普通。

トモ、ノゾミの隣に腰掛ける

トモ 説得、できた？

ノゾミ 全然。

トモ ダメじゃん。

ノゾミ ダメなのよ。「アンタね、絵がうまいだけの子なんてごまんといえるんだから。わざわざ美大にまで行って、それで食っていけるわけがないんだから……」

トモ 心配してくれてるんだよ。

ノゾミ トモは？ どうなったの？ 養成所の試験。

トモ (OKポーズ)

ノゾミ おめでどう！

トモ でもまだ一次の書類選考だから。

ノゾミ 絶対受かるよ！

トモ へへへ。

ノゾミ 東京？

トモ 東京。

ノゾミ 東京かああ！（興奮）

トモ そこかよ！ 田舎者！

ノゾミ 田舎者ですものお！

二人、笑いあっている。

トモ おばさんか、おばあちゃんは？

ノゾミ お母さんは買い物。おばあちゃんは……部屋で休んでる。なんで？

トモ これ。(袋の中身を見せる)

ノゾミ スイカだ！

トモ じいちゃんがカラスから死守した貴重な一玉です。

ノゾミ じいちゃんYeah！

祖母、登場。

祖母 あら、トモちゃん、いらっしやい。

トモ お邪魔してまーす。

祖母 あらあら、スイカ。トモちゃん持ってきてくれたの？ ありがとうねえ。

ノゾミ (祖母の様子が普通に帰っているので安心して) トモんちのおじいちゃんが死守したらしいよ。カラスから。

祖母 カラスはねえ、ネット張っても入ってくるからねえ。

ノゾミ かしこい。

祖母 うちもおじいちゃんが生きてた時は作ってたけどねえ。もう世話しきれないから。

トモ (祖母に) そういえば「回覧板もらってきて」オカンが言ってたんだけど。

ノゾミ 回覧板？

トモ まだ回ってきてないから、この家で止まってないかって。

祖母 そうだったかね。うっかりしてた。

祖母、家の中を探し始める。なかなか見つからない様子。ノゾミとトモも一緒に探し始める。

ノゾミ あ、これ？ (回覧板をみつけて祖母に渡す)

祖母 ああ、それだそれだ。ありがとう。(回覧板を受け取る)

祖母、回覧板を開くが字が小さくて読めないらしく、今度は老眼鏡を探し始める。ノゾミと友も再び一緒に探し始める。

トモ (老眼鏡を差し出しながら) これ？

祖母 ありがとう。(老眼鏡を受け取り) やんなるねえ、これだから年寄りは……。

祖母、回覧板にサインをしてトモに手渡す。

祖母 お母さんに謝つといてね。ああ、スイカ、冷蔵庫で冷やしとこうね。

ノゾミ 私やるよ。

祖母 いいよいいよ、おばあちゃんやとくから。トモちゃんと遊んでなさい。

祖母、スイカを持って立ち上がりとして膝に痛みが走り、倒れた拍子に持っていたスイカを落としてしまう。ノゾミとトモ、慌てて駆け寄る。

ノゾミ 大丈夫？

祖母 ああ、しまった、ごめん。ああ……。

ノゾミは台所から椅子を持ってくる。トモ、祖母を椅子に座らせる。

ノゾミ お母さんに電話しようか？

トモ あ、うち、オカン呼んでくるよ。

祖母 いい、いい。大したことないから。それよりスイカが……。

スイカは袋の中で、なかなか見事に割れているようだ。

祖母 ああ、ごめんねえ。

トモ (気遣って) 割れてても普通に食べれるよ。

ノゾミ (気遣って) むしろ切る手間省けたしね。

トモ 言える。

二人の気遣いで、かえってしよげ返ってしまう祖母。

ノゾミ とりあえず、冷蔵庫に入れてくるね。

祖母 ああ、いいよノンちゃん、おばあちゃんが……。(立ち上がるようにする)
ノゾミ (祖母を制して) おばあちゃんは座ってて？

ノゾミ、袋を持って台所へ退場。

祖母 ごめんねえ……。

【3 ファニちゃんトライアルキャンペーン】

呼び鈴が鳴る。

配達員(声) ごめんください。宅配便です。

祖母 はい。(立ち上がるようにする)

トモ (祖母を制して) いやいやいや。(ノゾミに) 代わりに出るね。

ノゾミ (トモに) ありがとう。

トモ、廊下側から出ていく。

祖母 (情けなくて) やんなるねえ……。

しばらくして、トモが大きな箱を抱えて戻ってくる。

ノゾミ (祖母に) 何頼んだの？ 通販？

祖母 さあ……。

トモ (送付状を見て) 差出人「ヤマダオサム」。

祖母 オサム？

トモ 誰。

ノゾミ 伯父さんじゃん。(トモに) お母さんのお兄さん。

トモ ああ。昔会ったことあるかも。

ノゾミ (祖母に) なんか聞いてないの？

祖母 さあ……。

ノゾミ 電話してみたら。

祖母 そうねえ。あの子、でるかねえ。

祖母、携帯電話で電話を掛けようとするがあまり使いこなせていないようで、もたついてい
る。見かねてトモが操作をして渡してやる。電話するが通じない。トモに教わりながらメッセ
ージを送っている。

ノゾミ (荷物をいぶかし気に観察しながら) 「精密機器」？ 開けてみていい？

祖母 ああ、いいよ。いったい何を送ってきたんだろうねえ、あの子は……。

箱の中からファニちゃんが現れる。異様である。

トモ なにこれ。

ノゾミ それは私が聞きたい。なんか他には入ってなかったの？

トモ (箱の中の冊子をみつけて) 「スタートアップガイド」

ノゾミ それだ。

トモ 「まずはファニちゃんの背面にある……」

ノゾミ なんて？

トモ 「まずはファニちゃんの……」

ノゾミ ファニちゃんて？

トモ (ファニちゃんを指し示しながら) これのことじゃない？

ノゾミ (ファニちゃんを見ながら) ああ。

トモ 「まずはファニちゃんの背面にある、電源ボタンを3秒長押しして、起動させます」

ノゾミ、ファニちゃん（マゴノハンド）の後ろに回り込み、背中を長押しする。

マゴ （起動音） コンニチハ

ノゾミ 喋った！

マゴ ニーハオ、ハロー、グーテンターク……

ノゾミ え、なに。

トモ 「こんにちは」って話しかけたらいいらしいよ。

ノゾミ こんにちは！

マゴ コンニチハ！ ニホンゴでセツテイされました。

三人 おー。

マゴ アナタのナマエをオシエてください。

ノゾミ おばあちゃん。

祖母 え？ あ、ヤマダサチエです。

マゴ ヤマダサチエ、サマですね。カシコまりました。いくつかシツモンさせてください。

祖母 ええ、どうぞ。

マゴノハンドは簡単な質問をして、祖母がそれに答える、というのを繰り返す。

ノゾミ おお、会話してる。

トモ なんかすごいね。

マゴ ショキセツテイはカンリョウです！ サイキドウします。（目を閉じて沈黙後、突然目を見開

き元気に）サチエさん！ 初めまして！ ファニちゃんのあるファンタスティックな生活へよ

うこそ！ ボクの名前は「マゴノハンド」です！

三人 マゴノハンド？

マゴ かゆいところはありませんか？

間

マゴ かゆいところはありますか？

ノゾミ おばあちゃん。

祖母 え？ ああ。そうねえ、背中あたりがちよつとかゆいかしらねえ……。

マゴ 背中ですね！ ボクにお任せ！（すばやく祖母の背後に移動し、絶妙な力加減で背中を搔く）

ノゾミ おお。

トモ どんなかんじ？

祖母 ああ、気持ちいいよ。

マゴ それはよかった！ ほかにかゆいところ、痛みがあるところ等ありませんか！

祖母 え？

トモ 膝が痛いつて言ってみたら。

祖母 最近、すこし膝が痛いんだけどね。

マゴ 膝ですね！ ボクにお任せ！（すばやく祖母の足元に移動し、絶妙な力加減で膝をマッサージする）

祖母 （気持ちよさそうに）これはいい。（膝を曲げ伸ばしして）だいぶ楽になったよ。

マゴ それはよかった！

祖母 肩も凝ってるから、もんでくれる？

マゴ 肩ですね！ ボクにお任せ！（すばやく祖母の背後に回り込み、絶妙な力加減で肩をもむ）

トモ おおー。

ノゾミ ファニちゃんって、何かと思ったら、マッサージ器なのね。

トモ あーね。

スズキ（声） いいえ！ それは違います！

三人、びっくり。スズキ、庭から現れる。

スズキ 突然のご訪問、失礼いたします。

ノゾミ 誰！

スズキ わたくし、株式会社ファン・ファニ・ファクトリーからまいりました、アナタのファンタスティックな毎日を応援する、ファンタスティックライフパートナー、スズキです。

三人 え？

スズキ (ゆっくりはつきり) わたくし、株式会社ファン・ファニ・ファクトリーからまいりました、アナタのファンタスティックな毎日を応援する、ファンタスティックライフパートナー、スズキです。

ノゾミ なんて？

スズキ 失礼。(咳払いしてさらにゆっくりはつきり) アナタのファンタスティックな……。

ノゾミ いやいや、別に聞き取れなかったわけじゃないから。

トモ 圧がすごいな、この人。

スズキ 恐れ入ります。本来なら呼び鈴を鳴らして玄関よりご挨拶申し上げるべきなのですが、すでに弊社製品をお試しいただいていると思われるお声がこちらから漏れ聞こえてまいりましたので、つつい、いてもたってもいられず、お庭に回らせて頂いた次第です。大変失礼いたしました。

ノゾミ もしかして、このファニちゃんのメーカーさん？

スズキ さようございます。いかがでしょうか。ファニちゃんの性能、お試しいただいた感想は。

祖母 ええ。とても気持ちいいですよ。

スズキ ファンタスティック！ ありがとうございます！

ノゾミ キヤラ濃いな。

トモ でも、なんでメーカーさんが直接？

スズキ このたびは「ファニちゃん・トライアルキャンペーン」初回サービスでご訪問させて頂きました。ご依頼主様のヤマダオサム様より、お伺いされておりませんか？
祖母 何も聞いていないんですよ。
祖母の携帯が鳴る。

ノゾミ 誰？
祖母 ああ。噂をすれば。

祖母、電話に出る。明らかに軽薄そうな中年男性が電話の向こうに現れる。

伯父 『おっす。おふくろ元気？』

祖母 あんた今どこにいるの？

伯父 『どこ？ え？ どこだっけここ？ もう国境越えた？（外国語で誰かと話している）ああ、いま●●だっけ』

トモ どこいるって？

祖母 聞いたことない名前の国。

ノゾミ おばあちゃん。（電話口をかわるようジェスチャー）

祖母 ちよつとノンちゃんにかわるよ。

ノゾミ 伯父ちゃん？

伯父 『ああ、ノゾミか、久しぶり。どうだ、中学楽しいか？』

ノゾミ 私もう高二だよ。

伯父 『まじか』

ノゾミ あのさ、おばあちゃん宛に荷物届いて、いま営業の人が来てるんだけど。

スズキ ファンタスティックライフパートナー。（ジェスチャーで訂正をアピール）

ノゾミ なんとかパートナーって人が今来てるんだけど。どうい話になってるの。

伯父 『ああ、届いたか！ どうだ、便利だろ、ファニちゃん。ばーちゃんももういい年だからそういうのがあったほうが便利だと思って。誕生日プレゼントに』

ノゾミ おばあちゃんの誕生日十二月だよ？

伯父 『そうだっけ。じゃあ母の日とか、敬老の日とか』

ノゾミ 母の日五月だし、敬老の日九月だよ？

伯父 『いいじゃん、なんでも。詳しいことはそのなんとかパートナーって人から聞いてよ。（外国

語で誰かと話している)ごめん、もう切るわ。またなんかあったら電話してよ。出れるかわかんないけど、出れたら出るから』

通話終了とともに伯父は姿を消す。

祖母 なんだったって？

ノゾミ 誕生日か母の日か敬老の日のプレゼントだった。

スズキ ええと、では、お話しさせていただいてよろしいでしょうか？

祖母 お願いします。

スズキ さきほど、「フアニちゃんってマッサージ器なんだね」とおっしゃっていましたが、実は違います。

ノゾミ でも、マッサージしてくれていましたよ。

祖母 大変気持ちよかったです。

スズキ それはフアニちゃんの機能の一部ではありません。こちらをご覧ください。(紙資料を渡す)

祖母 (紙資料を受け取るが、字が小さくてみえない) ああ、ちょっと待ってちょうだいよ。(老眼鏡を探そうとする)

スズキ (祖母を制して) ヤマダ様、今何か取りに行こうとされましたか？

祖母 ああ、字が小さいからちよつと老眼鏡を……。

スズキ 老眼鏡ですね！

マゴ 老眼鏡ですね！ ボクにお任せ！ (素早く移動して老眼鏡を祖母の手に持たせる)

祖母 まあ、ありがとうございます。

ノゾミ 何いまの！

トモ すごい！

スズキ ファンタスティック！ ちなみに、マゴノハンド自体にもルーペ機能がついています。

マゴ ルーペ機能ですね！ ボクにお任せ！ (指を輪っかにして眼鏡をつくり、祖母の目に当てる) よく見える！ (感動)

スズキ ファンタスティック！ところでヤマダ様、そろそろ暑くなってきましたか。

祖母 ああ、そうね。リモコンどこやったかしら。ファニちゃん、エアコンのリモコンを……。

スズキ ヤマダ様。

祖母 え？

スズキ (祖母を制して) 今度からリモコンは不要です。

祖母 え？

マゴ 暑いんですね！ボクにお任せ！

マゴノハンドがエアコンを指さすと、「ピピ」とエアコンの設定温度が下がる音がする。

トモ えっ、スゴ。

ノゾミ リモコン替わりじゃん。

スズキ ファンタスティック！ヤマダ様、ちなみに、今何か見たいテレビは？

祖母 ああ、(時計を見て) そろそろ●●が始まるから……。

マゴ ●●ですね！ボクにお任せ！

マゴノハンドがテレビを指さすと、テレビが点く。三人は感心して「おおー！」と歓声を上げ、拍手。マゴノハンドとスズキ、どや顔。

スズキ いかがでしょうか。

ノゾミ すごくいい。

トモ 便利。

スズキ ファンタスティック！まさに「かゆいところに手が届く」、弊社が自信を持ってお勧めする

「ファニちゃんリビングシリーズ・マゴノハンド」の最新モデルです。では、続きまして、もう一つの大ヒット商品をご紹介します。

一瞬の暗転。いつの間にかファニちゃんがもう一体増えている。

スズキ こちらが「フアニちゃんキッチンシリーズ」史上、最多の販売台数を誇る「ムスイクン」最新作です。ではここからは具体的な使用例を寸劇で紹介します。

トモ なぜ寸劇。

スズキ 失礼ですが、お嬢様のお名前は。

ノゾミ ノゾミです。

スズキ ではノゾミさん。(ノゾミに台本を渡し) この、黄色くマーカールを引いてるところを読んでください。

ノゾミ はい。(ハツとして) え、いや、なんで……。

スズキ 実是一緒に来るはずだったアシスタントが急遽来れなくなってしまって、役者が足りないんです。どうかご協力ください。(戸惑うノゾミにかまわず寸劇を始める) 「はああ。晩御飯の献立どうしようかしら」

間。

スズキ (ノゾミにジェスチャーでセリフを促す)

ノゾミ えええ。

トモ がんばれ!

ノゾミ 「マ、ママー」(恥じらいながら)

スズキ ノゾミさん。これは遊びじゃないんです。(真剣)

ノゾミ 「マ、ママー。ボ、ボク、カ、カリつとジューシーな唐揚げが食べたいなあ」(めっちゃへタ)

スズキ 「ええー、唐揚げってお家で揚げると、なんだかべちゃつとしちゃつてうまく揚がらないのよねえ。困ったわ」……そんなお悩みを解決してくれるのがこのムスイクン。ムスイクンに鶏肉を入れると……。

スズキがフアニちゃん(ムスイクン)に鶏肉を手渡す。

ムスイ なに作りましょか？

スズキ 「カリッとジューシーな唐揚げをお願いします」

ムスイ カシコマリマシタヨロコソデ〜！

ムスイクンは服の中に鶏肉を入れ、唐揚げを取り出す。

スズキ 「さあ、できたわよ」

三人 おおー！

スズキ ノゾミさん。(セリフを促す)

ノゾミ あっ、(台本を見ながら)「わーいおいしい！ ありがとうママ大好き〜」(めっちゃへタ)

トモ おお、これ食べていいの？

スズキ もちろん。

トモ 頂きまーす。うま。

ノゾミ おいしい。

スズキ 唐揚げだけでなく、時間のかかる煮込み料理やタンドリー料理など、全100種類のメニューに対応しています。

祖母 あっさりしてるねえ。

スズキ ご家庭の味に合わせて、味付けや調理時間もアレンジ可能です。

祖母 はああ、すごいねえ。

スズキ ファンタスティック！

ムスイクンとスズキ、どや顔。

スズキ なお、このムスイクン、調理機能だけでなく、キッチン周りのあらゆる便利機能を搭載して

トモ ます。では続きまして(カバンから新しい台本を出してくる)

トモ あ！ 次私やりたい！

スズキ (トモに) 失礼ですが、お名前は。

トモ トモです。

スズキ では、トモさん。ここからお願ひします。

ノゾミ 最初からトモがやってよ、無駄に恥かいた。

トモ (役になりきって) 「へい、いらっしやい。今日は●●が安いよ！」

スズキ (感心して) 巧いですね。

トモ あざっす。

ノゾミ さすが俳優志望。

スズキ 「あら、ほんと。安くておいしそう。今日は●●にしましょう。じゃあ材料は……そういえば、冷蔵庫に残ってる食材は何があったかしら」……と、買い物に出たはいいけど、冷蔵庫に何があったか思い出せない。そういうときムスイクンなら！

ムスイ いま冷蔵庫にあるのは●●と●●です。

スズキ 「あら、じゃあ副菜は●●を使って●●にしましょう」

トモ 「おお、お客さん、やりくり上手だねえ」

スズキ トモさん、素晴らしいです！ ファンタスティックです！

トモ あざっす。

スズキ そのほかにも、キッチンタイマー機能、スライサー機能、ゴミの自動分別機能など、便利な機能をたくさん搭載！

トモ おお！

スズキ ファンタスティック！

祖母 助かるねえ。

ノゾミ ほんとね。

スズキ 他にもたくさん商品があるのですが、本日はお持ちできませんでしたのでこちらのカタログをご覧ください。

スズキ、カバンからカタログを取り出して三人に渡す。

ノゾミ あつ、おばあちゃん、これいいんじゃない？
祖母 どれどれ。

ノゾミ これ、「外出にびったり、コロバヌサキノツエシリーズ」
スズキ ノゾミさん、お目が高い。「コロバヌサキノツエシリーズ」はシニア層に絶大な人気のあるモ

デルで、手軽な移動手段としてだけでなく、高いところの作業をするときにも大変便利で：
…。

カタログを広げている4人の周囲に次々と様々なファニちゃんが現れ、踊り始め、やがて溶
暗。

【4 元気になったおばあちゃん】

祖母の家。祖母は留守にしているようで、誰もいない。
ノゾミと母登場。

ノゾミ だから、体験入学だけでも行かせてよ。

母 大学行きながらも、絵の教室には通えるでしょ。

ノゾミ 私は美大に行きたいの！

母 美大には行かせませーん。(室内に向かって) 母さーん、来たわよー！
ノゾミ でも。

母 出かけてるのかしら。縁側開けっ放しで不用心な。

ノゾミ お母さん。

母 お金出すのはこっちなだからね。そんなに行きたいなら、将来自分で稼いでいけばいいし
よ。

ファニちゃん(留守番ちゃん) 登場。

留守番 来客を確認。顔認証します。

母 え！ なにコレ。

留守番 ノゾミさん、ユウコさん、認証OKです。留守番メッセージを再生します。「おばあちゃんは
買い物に行っています。30分くらいで戻りますから、中で待っていてください」……以上で
す。なにか伝言をお預かりしますか？

母 いいわよ預からなくて。中で待つから。……もう、何なのよ。

ファニちゃん（留守番ちゃん）は「来客情報を転送します」と言いながら退場。

ノゾミ 留守番してくれるんだ、便利。

母 あんなもの置いとくよりも、ちゃんと鍵かけて出かけてほしいわ。

ムスイ （台所から顔を出して）来客情報を受信しました。お客様、お待ちの中に飲物いれましょか？

母 わ！ びっくりした！

ノゾミ 私冷たいお茶。

ムスイ カシコマリマシタヨコロンデ！ ユウコさんは？

母 要らないわよ。

ムスイ カシコマリマシタヨコロンデ！（台所から出てきて、ノゾミにお茶を出す）

母、隣の部屋へ退場。

掃除（声） 時間になりましたよー。お掃除開始しますよー。

母（声） わー！

遠くから「お天気情報をキャッチしました。洗濯物を取り込みます」等、さまざまなファニちゃん
んの声がそこかしこから聞こえてくる。

母（声） なんなのよ、この家。変なものであふれかえってるじゃない。いったい何体契約してるのよ、あの人は。

祖母、ファニちゃん（コロバナサキノツエ）に乗って登場。

ノゾミ おばあちゃんおかえり。

祖母 ああ！ ノンちゃん、よく来たね。お母さんは？

ノゾミ あっちの部屋。あれ、おばあちゃん、なんか今日おしやれじゃない？

祖母 お？ 気づいてくれた？ 実はコーデさんっていう新しいファニちゃん、洋服のコーディネーターもお化粧もしてくれるんだよ。

ノゾミ それ私も欲しい。

母 （戻って来て）ちよつと母さん、またそんな得体が知れないものに乗って、ご近所から笑われるでしょ。

祖母 笑うどころかみんな羨ましがってるよ。トモちゃんちのおじいさんなんか、この間畑仕事するからこのコロツエ貸してくれて言って来たんだから。

ノゾミ コロツエ？

祖母 コロバナサキノツエ、長いから、コロツエって呼んでるんだよ。

祖母、ファニちゃん（ムスイくん）を呼んで、買ってきたものを渡す。

母 まったく。こんな気味悪いの、どんどん増やして……どうかしてるわ。

祖母 ノンちゃん、今日の晩御飯はノンちゃんの好きな●●、つくってあげるからね。

ノゾミ やったあ！

祖母 ふふふ。ムスイくん、●●準備してちょうだい。夕飯の時間は六時です。

ムスイ カシコマリマシタヨロコソデ！

ノゾミ おお、使いこなしてるねえ。

祖母 （得意げ）あ、そうだ、ノンちゃん、プリン食べる？（洋菓子店の箱を開けて見せる）

ノゾミ おいしそう！

祖母 駅前に新しくできたお菓子屋さん、テレビでも紹介されて、とっても人気なんだよ。ノンちゃんに食べさせてあげようと思って。

ノゾミ やったあ！ おばあちゃん、最高！

母 ノゾミ、おじいちゃんとこ先に挨拶してきなさい。

ノゾミ はいはい。(隣の部屋へ)

祖母 ムスイくん。私はお茶と……(母に) あんた飲物は？

母 コーヒーでも入れるわよ。(台所へ行くこうとする)

祖母 (母を制して) ああ、いい、いい。ムスイくん、コーヒー淹れて頂戴。

ムスイ カシコマリマシタヨコロンデ！

ムスイはコーヒーとお茶を持って台所から現れる。

母は気味悪がっている。ノゾミは隣の部屋から戻ってくる。

ノゾミ 仏壇、かわいいお花飾ってあったね。

祖母 裏の畑に咲いてたんだよ。おじいちゃんにも見せてあげようと思ってね。

母 なに、畑またやりはじめたの？

祖母 なんかもまた作るのもいいかな、と思ってね。

ノゾミ いいねあ、カラスとまた戦う？

祖母 戦ってみようか。(笑う)

母 もういい年なんだから、無理しないでよ。

祖母 やだね、人のこと年寄り扱いして。

母 年寄りでしょうが。そういうえばこないだ来た時、2階のトイレの電気切れかかってたよね。後

で換えとくから。

祖母 ああ、あれなら自分で換えたよ。

母 は？ ちよつとやめてよ、一人の時にそういうことしないで。危ない。

祖母 危ないことなんてないよ。コロツエ使えば、ひよいひよいなんだから。庭木の剪定だって最近

は自分でしてるんだよ。

ノゾミ すごーい。

母 だから！ 一人でそんな作業して、何かあったらどうするの！

ノゾミ ちよつとお母さん。

母 なによ。

ノゾミ おばあちゃんがやりたいって思ってやってるんだから自由にしたらいいじゃん。

母 あのね。私はおばあちゃんのことを心配して言ってるの。

ノゾミ だからって、そんなこと言わなくていいじゃん。

【5 スズキさんの電話】

離れた場所。スズキが誰かと電話をしている。仕事をやめようとしている後輩を引き留めているようだ。

スズキ

（電話越しに）そんなこと言わないでよ。せっかくここまで一緒にやってきたのに。……いや、確かに最近の上のやり方には僕も正直……。いやでもさ、結局僕らの仕事って、目の前のお客さんに喜んでもらってさ、そういうやりがいのある仕事って恵まれてると思うんだよね。うん……まあ、いや……うん。わかるけどさ。……とりあえず、また今度飯でも食いながら、ゆっくり話そう。ね。うん。じゃあ。

スズキは電話を切って、大きなため息。すぐにまた電話が鳴る。上司からだ。

スズキ

（電話に出て）はい、スズキです。はい。見込み入れて、月末には達成できる予定です。はい。……え？！ 追加？！ いやいや、今月目標だって普段より……いや、でも、それは……はい。わかりました。では、失礼します。

スズキは電話を切って、またさらに大きなため息。溶暗。

【6 スズキさんの話】

縁側に座っているノゾミ。スズキが庭に現れる。

スズキ ごめんくださいーい。ああ、ノゾミさん。おばあ様、おられます？

奥から、祖母が登場。奥の部屋からは「サチエさん、畑の水やりの時間です」等とフアニちゃん（リマインド様）の声が聞こえる。

祖母 ノンちゃん、おばあちゃんちよつと出てくるから。（スズキに気づいて）ああ、スズキさん。いらっしやい。

スズキ あ、サチエさん。
祖母 （庭に向かって）コロツエおいで〜。

庭からフアニちゃん（コロバヌサキノツエ）が登場。

スズキ お出かけですか。

祖母 ごめんなさいね、すぐ戻ってくるから。

スズキ ああ、いえ、こちらこそ突然すみません。お忙しいようなのでまた改めます。
祖母 いいのよ。

スズキ あ、でも。
祖母 約束もなしに急に來たつてことは、また売り上げ、足りなくて困ってるんじゃないの？

スズキ （気まずそうに）えーつと……。
祖母 じゃあ、またおすすめ、一台追加してもらおうかね。

スズキ (一瞬安堵するも、すぐに申し訳なさが勝って) あ、いやでも……。
祖母 いいのよ、いつもよくしてもらってるんだから。帰ってきたら書類書くから。お茶でも飲んで待っててちょうだい。ムスイクン。

ムスイクン、台所から顔を出す。スズキは「要らない」とジェスチャーし、ムスイクンは台所に戻る。祖母、ファニちゃん(コロバヌサキノツエ)に乗って退場。明らかに沈んでいるノゾミに気づくスズキ。

スズキ お久しぶりですね。お元気でした？

ノゾミ 元氣に見えます？

スズキ あんまり。

ノゾミ ……。

スズキ 大丈夫ですか？ 体調不良？

ノゾミ (無言で首を横に振る)

スズキ 何かあったんですか？ 悩み事？

ノゾミ (大きなため息)

スズキ ああ、すみません。言いたくなかったら、別に。

ノゾミ スズキさんて。

スズキ はい。

ノゾミ 高校生の時、進路で悩んだりしました？

スズキ 進路で悩んでるんですか？

ノゾミ 質問に質問で返すのやめてもらえますか。

スズキ すみません。

ノゾミ 反対されてるんです。母に。

スズキ ああ。(そういうこと)

ノゾミ、カバンからスケッチブックを出して渡す。

スズキ (絵を見て) おお、すごい。

ノゾミ 理屈ではわかってるんですよ。絵で食っていける人なんて一握りだし、就職に有利な学校選んで、資格取って安定した仕事に就いて、やりたいことは休日に趣味として楽しめばいいじゃないって。

スズキ そう、お母さんに言われたんですか。

ノゾミ (頷く) でも、そんなの打算じゃんって。やる前からあきらめて、打算で選んだ道で、私は、私の人生なのに、なんで……。

スズキ ……うーん。

ノゾミ (急に冷めて) すみません。こんなん聞かされても困りますよね。

スズキ いや、そんなことは。

ノゾミ いいです。忘れてください。

スズキ 一度開きかけた心閉ざさないでくださいよ。

ノゾミ だって。

スズキ なんていうか、こう、私もうまいことは言えないんですけど……。

ノゾミ 別にうまいこととか言わなくていいし。

スズキ 私の場合は……、あー、いやでもこういうこというとなんかあれですね。これはアドバイスってわけではないので、あー、参考までに……いや、でも、そうか、うん。(ぶつぶつ言うてる)

ノゾミ 前置きが長い。

スズキ すみません。

二人、顔を見合わせて、なんだか可笑しくなって笑いあう。

スズキ 正直なこと言うと、私は羨ましいですね。ノゾミさんが。

ノゾミ は？ どこが。

スズキ 私には無かったので。

ノゾミ なにが？

スズキ だから、やりたいこと。

ノゾミ ああ。

スズキ ノゾミさんみたいに、胸を張って「自分はコレがやりたいんだ」って、言えるようなもの、私

には何も無かったんです。

ノゾミ へえ。

スズキ でも、就職活動始めたくらいからかな、なんか急に焦ってしまってた。

ノゾミ 焦るって？

スズキ ノゾミさんみたいに「やりたいこと」を持つてる人が眩しくって。それに引き換え自分はなんて空っぽなんだろうって。そう思い始めたら止まなくなっちゃって。

ノゾミ なにそれ？

スズキ そうこうしてるうちに、なんか心のバランスおかしくなって。

ノゾミ ええ？

スズキ 大学も結局中退しちゃって。

ノゾミ うそ。

スズキ 仕事もせず3年間ずっと引きこもってました。

ノゾミ 引きこもり？

スズキ はい。

ノゾミ スズキさんが？

スズキ はい。

ノゾミ ええ？

スズキ 意外ですか？

ノゾミ だいぶ。だって、ほら、いま普通に働いてるし。

スズキ 普通、かどうかわかりませんが、まあ、おかげさまで。

ノゾミ (笑いながら) おかげさまで。

スズキ おかしいですか？

ノゾミ えー、だって。それって、誰のおかげさまなんですか？

スズキ あー、(少し考えて)皆様の？

ノゾミ (可笑しそうに笑いながら)なにそれ。

スズキ (つられて笑ってから、少し思い出すように)最初は、姉でしたね。

ノゾミ お姉さん？

スズキ 私の姉……あ、もう死んじゃったんですけど。

ノゾミ (驚いて)え。

スズキ 病気だったんです。ずっと。

ノゾミ そうなんだ。

スズキ 姉はもともとよく笑う人だったんです。でも入院が長びくにつれて、全っ然笑わなくなっちゃって。見舞いに行くたび、そんな姉を見るのがほんとつらくて。なんか元気づけられるものないかなあって、ネットでいろいろ探してたんですけど。

ノゾミ ネットで。

スズキ 基本引きこもりだったので。

ノゾミ なるほど。

スズキ で、その時に見つけたのが、ファニちゃんだったんですよ。

ノゾミ おお？

スズキ 当時はまだベータ版で、一般販売ではなかったんですが、モニターに応募して。

ノゾミ へええ。

スズキ ずっと臥せってた姉が、急にファニちゃんです院内を闊歩し始めたので、まあ、ちょっとした騒動？になっちゃって。

ノゾミ そりやそうだ。

スズキ 主治医と両親に大目玉食らいました。

ノゾミ ウケる。(笑う)

スズキ (笑っているノゾミを見ながら)それ見た姉も、(遠くを懐かしむように)笑ってましたね。ゲラゲラと。

ノゾミ ふうん。

スズキ 「また自由に動き回れるなんて思わなかった」「リーちゃんありがとう」って。

ノゾミ リーちゃん？

スズキ あ、(リーちゃんというのは)私のことなんですけど。その時に、ああ、そういうことかって。

ノゾミ そういうことって？

スズキ 私は、誰かに喜んでほしかったんだなって。

ノゾミ どういうこと？

スズキ 誰かに必要とされる存在になりたかったというか。

ノゾミ 誰かに必要とされる存在。

スズキ そのあと、まあいろいろあって、いまの会社に就職したんですけど、いまはたくさんのお客様に必要とされて喜んでもらえるのが、生きがいつていうか。ですから、私がいまこうしていられるのは、たくさん「皆様のおかげさま」なんです。

ノゾミ ふーん？

スズキ あー、つまり、何が言いたいのかというところ。(少し考えて)人それぞれじゃないかな、と。

ノゾミ 人それぞれ。

スズキ 私の場合、やりたいことがなくても、誰かに必要としてもらえることが、幸せなんですよね。

お母さんがおっしゃるように安定した生活が幸せって人もいるだろうし、逆に不安定でもやりたいこと突き進んでるほうが幸せって人もいるんじゃないですかね、きっと。人それぞれで。

ノゾミ ……。

スズキ ノゾミさんにとって何が幸せなのか、それって実は、お母さんにもノゾミさん自身にも、まだわかんないことじゃないですかね。

ノゾミ ……。

スズキ もう一度、ちゃんとお話ししてみてもいいですか、お母さんと。

ノゾミ ……どうせ聞く耳持たないもん、あの人。

スズキ やる前からあきらめちゃうのは、打算なんじゃないですか。

ノゾミ は？

スズキ 打算。ノゾミさんの嫌いな。

ノゾミ 急に痛いところ突く。
スズキ さっきだいたいぶ刺されたのでお返ししようかと。
ノゾミ なにそれ！

二人笑いあっている。遠くから救急車のサイレンの音。溶暗。

【7 報道】

暗闇の中、ニュースの音声が飛び交う。

報道 『次のニュースです。株式会社ファンファニアクトリーが販売するファニちゃんシリーズ

に、不具合が見つかり、波紋を呼んでいます』

報道 『昨晚開かれた緊急の記者会見では、集まった記者から厳しい質問が相次ぎました』

報道 『こちらが今回警察の家宅捜索が入った本社ビルです』

報道 『同社製品については今年に入り利用者が使用中に怪我をしたとの情報が相次いでおり、警察では不具合と事故との因果関係について慎重に調べを進めています』

報道 『一部週刊誌が報じた内部文書から、同社の経営体制に対して批判の声が高まっています』

【8 スズキの謝罪とノゾミの非難】

スズキ、頭を下げている。母、それを見下ろしている。

母 いつまでそうなさってるおつもりですか。

スズキ お母様とお話しさせて頂けないでしょうか。

母 部屋で休んでいますので。誰のせいでこんなことになったと思ってるんですか。あんな危険な

商品売りつけて。
スズキ 危険だなんて、今回のトラブルはあくまで……。
母 責任逃れするつもりですか？
スズキ いえ、決してそういうわけでは……。
ノゾミ (割って入って)お母さん。大袈裟なんだよ。結局おばあちゃんが自分で転んだんでしょ。最近膝も悪かったし。
母 (ノゾミに)そういう問題じゃないのよ。(スズキに)そうでしょう。
スズキ おっしゃる通りです。今回の不具合に関しては早急に改善し……。
母 スズキさん、でしたっけ？ あなたこれまでずいぶんたくさんの商品を母に売りつけてらっしゃったようじゃないですか。
スズキ え？
母 年寄りなんて簡単に口車に乗せられてホイホイ買ってくれるからいいかもだったんでしょ。
スズキ そんな！
ノゾミ やめてお母さん。
母 田舎の年寄りだまからかして、老後の蓄え巻き上げるなんて結構なお商売ですよね。
ノゾミ スズキさんはそんな人じゃない！
母 アンタは黙ってなさい！
スズキ 誤解です、私は……。
母 もう結構です。すべて解約させて頂きますから。
スズキ お考え直しいただけないでしょうか。
母 何を考え直せっていうんですか。
スズキ お母様は、弊社製品を大変気に入って下さって……。
ノゾミ そうだよ。
母 ご自分の営業成績に関わるからそんなことおっしゃるんじゃないんですか？
ノゾミ お母さん、何でそんな言い方するの。おばあちゃんあんなに楽しそうにファニちゃん使ってたのに。
母 年寄りが調子乗って変なものに手を出すからこんなことになるんですよ。

ノゾミ なにそれ。今回のけがだって、別にファニちゃんが悪いわけじゃないじゃん。それなのにファ

ニちゃんを目の敵にしておばあちゃんから取り上げるみたいなことするの！

母 子どもは黙ってなさい！（スズキに）とにかくもうお帰り下さい。

ノゾミ お母さんって、いつもそう。

母 は？

ノゾミ そうやって子どもだとか、年寄りだとか、そんな理由で意見も聞いてもらえないの。

母 はあ？

ノゾミ 「自分でできないんだったら素直に従え」「金を出すのは親なんだから親に従え」……よくそ

んなひどいこと平気で言えるよね。

母 どこがひどいのよ。

ノゾミ ひどいよ。相手が反論できないってわかってて、わざとそんな言い方するんですよ。「心配し

てる」とか「アンタのため」とか、そんなの全部口先ばかりじゃん。

母 はあ？

ノゾミ お母さんは、「私がいなきゃあなたは何もできないでしょ」って、相手を思い通りにしたいだ

けなんだよ。

母 （深いため息）そう。全部私が悪いのね。分かった。

ノゾミ なに？

母 全部犠牲にして、家事やって、子育てして、親の世話までして、その挙句に悪者扱いされるの

ね。

ノゾミ そんなこと言っていない。

母 言ってるでしょ。

ノゾミ そうやって、「私はこんなに尽くしてやっってるのに」ってアピールやめて。相手に感謝されたく

て行動してるわけ。そういう恩着せがましいのホント嫌。

母 （自嘲気味に鼻で笑う）ああ、そう。それは悪かったわね。

間。

スズキ (二人を気遣いながら) あの。今日は、これで失礼します。また、参ります。

スズキ、一礼して立ち去ろうとする。が、数歩進んでから立ち止まり、沈黙する二人に振り返る。

スズキ そんなにいけないことですか？

二人

スズキ (たどたどし気に) あの。誰かに、誰かのために、行動して、感謝されたい、とか、喜んでほしい、とか、心のどこかで期待してしまうのは、それは、そんなにもいけないこと、なんででしょうか。サチエさんは、お二人が来られる日に合わせて、お二人の好きな献立考えたり、ノゾミさんが好きそうなお菓子屋さん探しに出かけたり、されていました。お二人を、喜ばせたかったんだと、思います。そういうときのサチエさんすごく、楽しそうだったから。僕は、そういうの、すごく、よくわかるから、だから、そういうの、否定されちゃうのはちよつと……きついな……。

間

スズキ (冷静になって) すみません。失礼します。

スズキ、再び一礼して退場。しばらくして、母退場。母の後姿を見送って、ミズキも退場。溶暗。

【9 誹謗中傷】

薄暗がりの中、重い足取りで歩くスズキ。スズキを責め立てるように、周囲にはネットやテレビでの罵詈雑言がこだましている。スズキは次第に追い詰められ、その場にうずくまる。しばらくすると、入院着姿の少女(スズキの姉)が現れる。少女はスズキを立ち上がらせると、励ますように頭を撫で、やがてそっとスズキの背中を押す。スズキは、再び前を向き、歩き始める。少女は見守るように、スズキの後をついていく。暗転。

【10 ノゾミと母とスイカとお塩】

ヤマダ宅。廊下には祖母のための車いすが置いてある。母は忙しく家事をこなしながら、伯父に電話をかけている。

母

だから、こうやって相談してるんでしょ。そもそもお兄ちゃんが変なもの母さんに買ってきかせいで……。は？ いやいや、だから、施設っていったって、そんな簡単に入れるわけじゃないのよ。もつと真剣に……。私だって自分の家のことで大変なのよ。ダンナだってまた転勤だし、ノゾミも来年受験なんだから……。なんでそんな無責任なの。自分の親のことでしょ。：：：なんでよ！ お兄ちゃんっていつもそう。自分だけ好き勝手に、自分の責任からは逃げたばかり！ ちょっと話まだ終わってない……！

電話は一方的に切られたようだ。すぐになおすが応答はない。母は、苛立たし気のため息をつく。ノゾミは廊下から母の様子をうかがっている。

母

母さん。もうすぐデイの人来るから、今のうちに着替えとこ。

母は祖母の車いすを押して隣の部屋へ。

母（声）

ちよつとなにするの。

祖母（声）

要らない。

母（声）

は？

祖母（声）

誰も頼んでない。

母（部屋から出てきて部屋に向かって叫ぶように）一人じゃ靴下もはけなくせに、なんなのその態度は！

母は自分の発した言葉の悪辣さに驚き、縁側に腰かけてひとり静かに泣き始める。ノゾミはその背中を見ながら、声をかけられないでいる。やがて台所から皿に盛ったスイカと塩を持って

きて、母の隣に座る。二人はスイカを食べ始める。時折塩を振る。長い沈黙。

ノゾミ 何でスイカって塩振るの。

母 知らない。甘くなるんじゃない。

ノゾミ しよっぱいのに？

母 しよっぱいのかけると、甘みが増すんじゃない。

ノゾミ へー。

母 そういえば、昔ここでスイカ割りしたよね。

ノゾミ いつ？

母 アンタが小さい頃。

ノゾミ そうだっけ。あんまり覚えてないけど。

母 そうだったのよ。忘れちゃったかもしれないけど。

間

ノゾミ お母さん。

母 なに。

ノゾミ お母さん、通訳になりたかったってホント？

母 誰から聞いたの、それ。

ノゾミ 伯父さん。

母 要らんことは話するんだから。

ノゾミ 後悔してる？

母 何を？

ノゾミ 諦めたこと。

母 どうかな。

ノゾミ どうかなってかんじ？

母 なに。後悔しててほしいの。

ノゾミ えー。ちよつと。

母 性格悪いな。誰に似たのかしら。

ノゾミ 誰かなあ。

母 高校卒業して、就職して、結婚してアンタ生まれて、まあ人生の目的は明確だったよね。特に

アンタが生まれてからは。

間。

ノゾミ ごめんね。

母 なに。

ノゾミ ごめん。(泣いてる)

母 なんで泣くのよ。

沈黙。

母 ま、実際のところ、夢追いかけて地元を出てった同級生見てさ、悔しかったり、羨ましかったりもしたけど。しばらくすりゃ一人、二人、三人、って、結局地元に戻ってきて、高校の卒業

文集に書いた夢とはかけ離れた仕事について、毎日あくせく働いてんのよ、みんな。そんなの見てさ、どっかほつとしたのよ。この子たちが、夢追いかけて時間無駄にしてる間に、私はすっかり踏ん張って、家族作って、家族守って生きてきたんだって。私の人生のほうはずっと価値あるじゃんって。(苦笑交じりにため息をついて) あー、我ながらなんか、性格悪い。

二人

二人、笑う。

ノゾミ 誰に似たのかしらねえ。

母 誰かしらねえ。……そうやって、誰かの役にたってるって実感してないと不安だったんだろう

ね。(祖母の部屋のほうを見て) おばあちゃんも、そうだったのかもね。

間。

ノゾミ おばあちゃん、スイカ食べるかな。

母 もう少し小さく切ってあげたら。

ノゾミ そうだね。

音楽。ノゾミは台所へ退場。母も台所へ向かおうとするが、庭先にスズキが現れる。スズキ、深々と一礼。母はゆつくりとスズキに近づき、スズキが持ってきた「再発防止案」の資料を受け取る。ノゾミ、台所から出てくる。母はスズキにスイカにもスイカを勧める。やがて溶暗。

【11 一年後】

1年後の祖母宅。縁側でノゾミが大学パンフレットや書類を広げ、プレゼン資料を作っている。真剣である。トモが庭から登場。ノゾミは気付かない。トモは声をかけようとするが、ノゾミがあまりに真剣なので、何も言わずに横に座って作業を眺めている。

ノゾミ (トモに気づいて) うわ! びっくりした!

トモ 久しぶり。

ノゾミ 久しぶり。1年ぶり?

トモ ああ、もうそんなになるか。

ノゾミ いつこっち帰って来たの?

トモ 今朝。夜行バスで。(ノゾミの手元の書類たちを見ながら) なにしてたの?
ノゾミ え?

トモ それ。

ノゾミ ああ。プレゼン資料作った。

トモ プレゼン資料？

ノゾミ うん。

トモ 誰に何をプレゼンすんの。

ノゾミ お母さんに。

トモ うん。

ノゾミ 「あなたの娘が美大に行くべき3つの理由と、その後の人生におけるリスクマネジメント案」を。

トモ うん？

ノゾミ 私、気付いたんだよね。

トモ なにに？

ノゾミ お母さんを説得させるために必要なのは、具体的なビジョンと、確かなエビデンスなんだよ。

トモ え、そういうカンジ？

ノゾミ 来週の三者面談が決戦だからさ。それまでにお母さんを納得させるプレゼンを準備しないとイケないんだ。(再び資料に取り掛かる。なんかギリギリしている)

トモ (しばらくノゾミの様子をながめて感慨深そうに) ノゾミ、なんか、変わったね。

ノゾミ え？

トモ 去年の今頃は、今にも死にそうな顔してたのに。

ノゾミ そんなことないでしょ。

トモ あるある。でも、いまはなんか……しぶとく生きていきそう。

ノゾミ ほめてる？

トモ ほめてるほめてる。最上級のほめだよ。

笑いあっている二人。母登場。

母 あら。トモちゃん、久しぶり。帰ってきてたの。

トモ お邪魔してまーす。

母、ノゾミの広げている資料を覗き込む。

ノゾミ (隠して) ちょ！ まだ準備中！

母 (不敵に笑いながら) はいはい。プレゼン楽しみにしていますよー。トモちゃん、ゆっくりしていつてね。(隣の部屋へ退場)

トモ 手強そうだね。

ノゾミ 手強い手強い。向こうも大学パンフ取り寄せたりして、質問リストとか作って対策してくるか
らね。トモはしばらくこっち居るの？

トモ 月曜の夜にはむこう戻るよ。オーデイション近いからね。

ノゾミ 頑張ってたね。

トモ 落ちちゃったからねえ、養成所の試験。

ノゾミ あの時のトモの方がよっぽど死にかけてたじゃん。

トモ まあ、でも。これから結果出して、見返してやりますよ。

ノゾミ おお。しぶとく生きていきそう。

トモ ほめてる？

ノゾミ 最上級のほめです。

二人笑っている。コロツエに乗った祖母登場。

ノゾミ あ、おばあちゃん。お帰り。

祖母 ただいま。あらあらトモちゃん。来てたのね。

トモ お邪魔してまーす。

母 (隣の部屋から戻ってきて) 母さんお帰り。きゅうり採って来てくれた？

祖母 はいはい採ってきましたよ。はい、初物も。(きゅうりとスイカの入った袋を渡す)

母 (受け取って) あら。スイカ。

ノゾミ (覗き込んで) おお! 今年初スイカじゃん!
トモ いいなあ。今年うちスイカ全滅ってじいちゃんへこんでたんだ。
祖母 ふふふ。
ノゾミ スイカ割りしようよ!
母 スイカ割り?
トモ いいねえ。夏っぽい。
祖母 懐かしいねえ。
ノゾミ おばあちゃん、なんか棒ない?
祖母 棒?
母 お兄ちゃんのバット無かったっけ?
祖母 ああ、確か納屋にしまってたかしらね。
ノゾミ 納屋! 取ってくる!(家の裏へ)
トモ あ、待って! うちも行く!(ノゾミについていく)
母 (二人の後ろ姿を見ながら) はしゃいじやつて。
祖母 あんたたちも、小さい頃はあんなだったけどねえ。
母 そうだったっけ?
祖母 そうだったのよ。
間。
祖母 あ、私、洗濯ものどうしたかね。
母 さつき終わってたから干しといたけど。
祖母 ああ、そう。
母 さ、お皿でも準備しておきましようかね。(台所へ)
祖母 (ぼつりと) いつもありがとうね。
母 え? なんかいった?
祖母 いやべつに。

母 母
母 祖母
母 なに。
母 なんでもないよ。
母 なにそれ。

ノゾミとトモがレジャーシートとバットを持って戻ってくる。スイカ割りに興じる一同。
どこからかスズキの声。

スズキ 『こちらが、この夏の最新モデル・コロバナサキノツエDXです。従来モデルに比べ軽量化し、さらに安全設計も充実。使用者のわずかな体調変化を見逃さず、緊急時も即座に対応できるドコデモドクターサービスを標準搭載。お客様の声により生まれ変わった、新しいファニチャーシリーズをぜひお試しください。できないこと、やれないこと、そんなのあって当たり前。だからこそ、そんなことを悔やむのも、あきらめるのも、もうおしまいにはませんか。自分のために、誰かのために。あなたの明日に、ほんのちよつと、ファンタスティックを』

幕

※本作は二〇一四年度上演の本校創作脚本『つるつる』(旧筆名…無頼花)を原案として、新たに創作した作品です。